

汲古一心

— 講演より — 『書の現代性』(四)

中村素堂

たとえば鈴木翠軒先生など、一本の線が斜めにすつと下がって行く。上から下まで、一呼吸の線の下がっていく。あれを悪くいう書家もいますが、一本の線を見てみると、何ともいえない清らかな線で、斜めに切れてくる時の中に、じーっと生命を持っている。一呼吸だからといって、ただすつと機械で引いた棒のような線とは全然違う。ちゃんと息をしながら生きた線が出てくる。だから、上と下に何かあつてつないだりすると、そのつながる線の美しさというのは、そこだけでひとつの芸術です。そういうことをいったら鈴木先生のご門下は大反対でしょうけれども、あの呼吸感を除いてしまつたら、そう優れた書じゃなくなるのじゃないでしょうか。一時あの先生の書が大流行をした。たとえば中国で呉昌碩が賞められて、やたらと流行つて誰も彼もが書いた。とうとう中国に呉毒という言葉が生まれた。呉昌碩の毒という意味で、その真似をした者はみな毒されたということです。鈴木翠軒先生の字をそんなことをいうわけじゃないのですが、一時流行し過ぎてしまつて、みな翠軒先生の亜流ですから、必ずしも翠軒先生のような浄らかさはない。それでも翠軒先生に近いと思つていた人もいるようですが、滅多にあるものじゃないと思う。真似てみるのはいいことですが、むしろ呼吸感というものが書に出るひとつの芸として展開できることを今の人が大体は知つたと思う。だから、少し書を芸術にしようとする人は、一本の線の中に呼吸感のよさというものを表す。われわれの一番手近にいる松井先生など、その呼吸感を沈潜させる方法を盛んに利用していらつしやる。どの展覧会だつたか忘れまじけれど「肇」という字を小篆で書いたのは、墨を非常に滲ませて、その滲みを計算のうちに入れながら書いたもので、あれなど造形ならば、何もああ書くのは難しくないのですが、あのくらい静かに呼吸感を沈ませたおいて持つて行く。しかもその時に、墨の滲みまで計算されていくということ、芸だなあと見ていました。

つまり芸術というのは、乾いた墨を使おうが、滲む墨を使おう

が、強かろうが弱かろうが、その計算までしてあつて、そこに自分の呼吸感と造形と合わせながら、ひとつの操作が完成の域に持つて行けば、芸といわれないではいられません。あれなど素晴らしいひとつの芸ではないだろうか。おそらくあの字なども、鈴木翠軒先生の字と同じように、古人は一度もやつたことがないと思う。今の人は、別に自分の呼吸感とかいう言葉でいつていらつしやる。いつていらつしやることなく、呼吸感というものから、今のものが生まれたということは知つてゐるようです。古人がやりおえなかつたものを作れるということ、たしかに知つたようです。だから、がさがさしているということは、呼吸の調整が付いてないということ、いいようによつては、筆の調子が整備されてないからとか紙面の整理がきかないからだ、空間が生きてないからだ、いろいろいいようはありますけれども、書を芸にしようとする人ならば、その基本のものは静かに呼吸して書く。そうじゃなく、もっと思ひ切つて大きな吐息みたいな呼吸を打ち込んだところから、逆に静かな呼吸とでコントロールするとかいうことを考えれば、それがひとつの芸になるのじゃないでしょうか。そして今の人達の現代性とかいうものの根本の奥底に潜んでいるものひとつであり、それが現代性というものを造形する要素なので、それから暖かいものが出てこようが、厳しいものが出てこようが、翠軒先生みたいなものが出てこようが、何となく現代性があるでしょう。古人が、そういう風に捉えようとしていなかったものを基本において捉えているからなんです。現代性というのは、誰か書いた人があつて、人気もあるから、その作家のものをなぞつてみて書いていこうというものは現代性じゃない。それはみな模倣だから、平安朝の模倣だつて鎌倉の模倣だつて今の模倣だつて同じでしょう？ 模倣すなわちイミテーションといふことになれば、みなイミテーションです。そうじゃなく、オリジナルなものは何からできるかといえ、どんな造形性のもので、むかしの人が考え得なかつたもの、むかしの人が呼吸感を忘れていたんじゃないんですよ。(つづく)

『筆間雑記』中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊)より転載。

〔祭墨〕昭和五十二年十月